

近松門左衛門の描く遊女たち

——恋愛成就譚としての心中物——

久松 亜 未

はじめに

享保七年（一七二二）に幕府は心中物の出版及び上演を禁止した。その背景には、現実世界での心中の流行があつた。その発端ともなつた作品が近松門左衛門の『曾根崎心中』である。『曾根崎心中』は近松が五一歳の時、元禄十六年（一七〇三）に初演された。これは世話物の第一作目であり、それまでの時代物とは違い、全く新しいジャンルを確立した作品であつた。

近松は、生涯で世話物を二十四作品発表した。その中で、男女が心中するものはいくつかあるが、遊女が心中するもの

は全部で六作品ある。『曾根崎心中』（一七〇三）、『心中二枚絵草子』（一七〇六）、『心中重井筒』（一七〇七）、『心中刃は氷の朔日』（一七〇九）、『生玉心中』（一七一五）、『心中天網島』（一七二〇）がそれに当たる。遊女の心中を描く心中物は、より悲劇性が増すストーリーになっている。特に『曾根崎心中』、『心中天網島』は人気の高い作品で先行研究も数多く存在するが、その多くは単独作品研究であり、彼女たちを個々に比較し分析する研究は少ない。確かに、近松の描く心中する遊女は、どこか似通つた部分がある。しかし、その性格や死に至る理由、死に方までもが全て酷似している訳ではない。遊女というと、色を売る悲しき運命の女たちと思われがちだが、果たして本当にそうだろうか。

堀江珠喜氏は、近松が描く遊女と男の心中は「純愛心中」であると述べている。¹⁾ 心中をすることは、究極の愛の証明であった。そして同時に、今世で結ばれることを許さなかつた世間に対する訴えでもあつた。彼女たちは必ずしも悲劇のヒロインではなく、己の確固たる信念を持つて自らの意志で選択をする強い女であつたのではないだろうか。

本稿では先の六作品に登場する遊女たちの性格や心中の理由、そして近松が創出した遊女像について考察していく。以下、六作品の本文は、『新編日本古典文学全集・近松門左衛門集²⁾』を使用することにする。

一 遊女たちの性格

1 お初

『曾根崎心中』に登場する遊女お初は、六作品の中で最も積極的な女である。お初は徳兵衛という男と心中をするが、共に死のうと提案するのはお初であり、心中をリードするのもお初だ。この作品の一番の見せ場である通称「足問答」では、縁の下に隠れる徳兵衛に対して「この上は、徳様も死な

ねばならぬしなるが、死ぬる覚悟が聞きたい」と言つて足を差し出す。徳兵衛はお初その足を取り、自らの喉笛を撫でて死ぬ覚悟を示す。また、徳兵衛が死なねばならない運命となつた原因の九平次がお初に「おれがねんごろしてやらう、そなたもおれに惚れてちやげな」と言つのに対しお初は、

こりや忝かるわいの、わしとねんごろさあんすと、こなたも殺すが、合点か、徳様に離れて、片時も生きてゐようか、そこな九平次のどうずりめ、阿呆口をたゝいて、人が聞いても、不審が立つ、どうで徳様、一所に死ぬる、わしも一所に死ぬるぞやいの

と九平次を軽く脅し、罵倒する程の気の強さを見せる。そしてここで注目すべきは、座敷で九平次の相手をしながらもその実、縁の下にいる徳兵衛に自分の想いを伝えていることだ。お初は、徳兵衛の覚悟を知り、自分も一緒に死ぬことを誓つ。この足を差し出すという行為は、心中の提案を示しており、もう死ぬしかない徳兵衛にとってこの提案は唯一の救いではない。詳細は後述するが、お初にとって死なねばならない理由はない。それにもかかわらず、自身も死ぬことを選ぶ。これを聞いた徳兵衛は涙を流し、お初の足を抱きしめる。

これらのお初の言動は、彼女の勝気な性格による。男に対しても臆することなく自分の意見を言う。大谷晃一氏は、

お初には心意気がある。勝気である。いつも果敢に振る舞う。徳兵衛へ一途な情愛を寄せる。遊女の持つ打算や駆け引きもない。死ぬ覚悟をし、男を引きずるように死に向かつて行く。その必死さに精神力の美しさがある

と述べている。⁽³⁾この時代に限らず、女は男を立てなければならぬという慣習が古くからあった訳だが、お初はそういったことはしていない。むしろ、徳兵衛の自尊心を傷つけている気さえする。お初は良くも悪くも男勝りな性質を持っている。この二人の関係において主導権を握っているのは、お初だ。このお初の性格が二人の死をより確実なものにしている。

2 お島

『心中二枚絵草子』に登場する遊女お島は、市郎右衛門という男と心中をする。お島は『曾根崎心中』のお初と同じ天満屋の遊女であり、「おはつが後嗣ぎ」として注目されていた。天満屋の亭主は、お島がお初のように馴染み客と心中することを恐れていた。しかし、お島自身は心中をすることは

良しとしておらず、雇い主に対して失礼だと考えるような道理を弁えた人物である。お初の心中事件のこともあり、心中をすることで店側にかかる迷惑なども理解していたはずだ。

では、何故お島は市郎右衛門と心中をしたのか。それは彼女の家族愛による。

わしらが今のこの勤め、伊達にも、派手にも、身のためでも、一日片時なる事か、親兄弟のいとしさ故、面白からぬ勤めをも、つらいと一度言ひ遣らぬは、親兄に苦を掛けまいため

この発言からもお島の愛は市郎右衛門のみならず、自身の親兄弟にも深く注がれていたことが分かる。自分が辛くとも愛する家族のために苦界に身を落とした。だからこそ、義弟の計画により陥られ、拳句の果てに養父から、実子ではないと言われ勘当されてしまったにもかかわらず、義弟の罪を被り、養い親の恩に報いようとする市郎右衛門が痛ましく思われたのだろう。作中、市郎右衛門がお島と会ったという描写はあるものの、一連のことをお島に詳しく説明する場面はない。しかし、お島は、

私が馴染の市様の勘当は、弟御の無実の難を身に被き、

所の住ひもならぬとよ、これはなんたる胸欲ぞや。

と市郎右衛門の状況を述べている。これを盗み聞きしていた市郎右衛門は、自分の境遇を真に理解し、なおかつ自分と共に死ぬことを厭わないお島の優しい言葉に忍び泣く。お島は市郎右衛門が聞いていることを知らなかったが、

生き身は死に身、ことにまたこのごろ酒にあてらるゝ、

もし頓死でもいたしなば、くだされた茶が末期の水と述べるので、市郎右衛門と死ぬことを心に決めているのが分かる。お島がこのような覚悟を決めたのは、市郎右衛門の家族に対する思いに同情したことが理由だ。お島自身も家族のために身を売るといふ自己犠牲を厭わない性格であるがゆえに、市郎右衛門の行為や思いが自分と重なって見えたのだらう。

鳥居フミ子氏は「おしまは市郎右衛門の死の決意を明確に理解し、迷うことなく市郎右衛門の死に殉じた」と述べている⁴。お島の性格は、お初のように勝気なところはない。しかし、その死の覚悟は誰よりも強い。何故なら、本稿でとり上げる遊女の中で唯一、自分自身の手で死んでいるからだ。愛する人に対する思慮深さ、そして自ら死ぬ勇氣がお島の注目

すべき性格である。

3 お房

『心中重井筒』に登場する遊女お房は、妻子ある身の徳兵衛という男と心中をする。六作品の中では最も現実的な女だ。一途に徳兵衛のことを想っているが、自身のために利用していることは肯定せざるを得ない。悪女とまでは言わないが、金が工面できないことを馴染み客の徳兵衛に相談して用意させようとしたり、徳兵衛が約束の時刻になっても訪れないのを女房のお辰の差し金かと考えたりするところに、人間らしい保身や打算が垣間見える。

そうは言っても、これも全て徳兵衛と一緒に居たいという純粹な想いからくるもの。果てには自害しようとするお房だが、内儀に止められる。その後、徳兵衛がお房に会いにやってくるが、二人を会わせまいとする兄弟夫婦がお房を向かいの店へ遣って、徳兵衛を二階の部屋へと押し込める。徳兵衛は押し込められた部屋の火燵で一人苛立ち、お房への想いに焦がれる中、お房は屋根伝いに徳兵衛がいる部屋へと忍び込む。

ア、いとしばや。気を揉まんす故にやら、顔にたんと瘦せがきた。その苦は誰がさするぞい、皆わし故と、それはく忘るゝこともあるにこそ、さりながら、もう苦しめてくだんすな、(中略)一目逢えばこれ本望、末頼みない契りなれば、これ限りくくと、逢ふ度この観念、いまさら溜めて言ふことなし、貞女を立てるおたつ様の蔑みも恥づかしい、仲良うしてくださいませ。互ひに生れ変わつたら、本妻定めぬその先に、早う女夫になりませう、言ひ置く事はこればかり。サアく戻つてくださいませ

お房は、徳兵衛に謝罪し自分は一人死ぬ覚悟でいることを伝える。お辰との仲のことも気に掛けて、生まれ変わったら一緒になろうと言う。そして、涙ながらに家に戻るよう促す。ここにお房の策略がある。内儀に、徳兵衛と一緒になっても、一生後ろ指をさされる人生になると忠告され、納得することができなくとも理解はしたがゆえの言葉であった。しかし、頭で理解していても徳兵衛と一緒にになりたいという気持ちがなくなた訳ではない。言葉では徳兵衛を想つて帰れと言つが、その行動は伴っていない。涙を流し、徳兵衛にしっかりとしがみつきなから言う。これは彼女が意識的にやったこと

だと思われる。そもそもお房は、徳兵衛が約束の時刻になつても来ない時に「じたいこちの無理、身一つ胸を据ゑたれば、いつそ悲しいこともなし」と考えている。元々、自分が無理なことを言っているのは承知しているのだ。真に一人で死ぬ覚悟を決めていたなら、徳兵衛に自ら会いに行くことはしないだろう。

お房は感情的な一面も持っているが、軸となる性格はその冷静な判断力だ。金の問題、徳兵衛とお辰のこと、自分の行く末をどうするべきかを俯瞰的に考える。その上で、徳兵衛を我が物にしようとする死の道ずれにする強かな女である。

4 小かん

『心中刃は水の朔日』に登場する遊女小かんは、平兵衛という男と心中をする。小かんは鷹匠頭として武家に仕えていた父親を持つ。そのため、武家社会の価値観が身につけている。父親が罪を犯し浪人してしまつた後に叔母に引き取られることになるが、その叔母の家庭も困窮してしまつた。小かんは、その様子を見て自ら身を売つて遊女となる。しばらくして、父親の罪が許され、故郷で小かんの嫁入りが決まつた。

しかし、その時には既に平兵衛と深い仲となつていたため、「国へ歸つて、親達の顔も見たうはござれども、平様にちよつとも離れうとは、え言ひますまい、叶はぬ首尾に極まつて、国へ下るが定ならば、わしは見事に死にまする」と平兵衛と離ればなれになるくらいなら死ぬとまで言う。小かんにとつて平兵衛と離別するのは、遊女の苦界よりも辛い世界に身を落とすことと同じであつたのだらう。

小かんは一人死ぬ覚悟で、せめて死ぬ前に一目会いたいと思つている時に人混みの中に平兵衛を見つける。小かんは泣きながら「これではすはといふ時に、国へ心が引かされて、未練の出来まいものでもなし、こな様に会ひしだい、死んでのけうと覚悟を据ゑ、剃刀は身を離さぬ。これ見さんせ」と懐に入れておいた剃刀を平兵衛の手に持たせ、自分の手を添えて己の腹に突き立てようとする。まるで武士が刀を肌身離さず持ち歩くかの如く、小かんは剃刀を持つていた。小かんは平兵衛の真意も確かめぬまま死に急ぎ、半ば押しつけるように平兵衛に自分を殺させようとする。これは小かんが武家社会で育つたがゆゑの自尊心からくる行為である。死ぬなら潔く、未練がましく故郷を想つ見苦しい姿を見せたくない

という思いが窺える。

小かんにとつて、一番の気掛かりは母親であつた。その母親から手紙が届くが、読んでしまうと、より一層故郷が思い出されてしまうからと死の直前までその手紙を読まない。小かんは、決断力に優れ、自制心の強い女である。また、武士由来の気高さも備えており、六人の遊女の中では一番死ぬことに對して潔い性格と言える。

5 おさが

『生玉心中』は『曾根崎心中』の十三年忌追善劇として作られた。そのため、似たようなストーリーと登場人物になつている。本作に登場する遊女おさがは嘉平次という男と心中をする。その性格はお初とよく似ており、敵役の長作という男に肌を見たいと懐へ手を入られた際には、押しかけて「小みともない、おかつしやれ、言ひにくけれど、このさがと、平様とは、一心づくで逢うてゐる、こなたのやうな口先ではないぞや」と言い放つ。この場面からも、お初と同じような気の強さが窺える。しかし、おさがには、お初には見られない他者への思いやりが顕著に見られる。おさがは嘉平次

の家族と良好な関係を築き、自分たちの仲を認めてもらいた
 と思うている。家族を蔑ろにしている嘉平次に対して「一
 度は父御さんのお耳へ入れねばどうもならぬぞえ、(中略)
 私かはいが定ならば、父御さんとも兄弟御とも、首尾ようし
 てくだんせ」と諭す。このように、二人だけで幸せになるこ
 とはできないと、愛する人の家族も大切にと考えるような人
 物だ。

ところが、ことはそう上手くはいかない。嘉平次の家族は、
 おさがを良く思っていない。嘉平次には許嫁のおきは
 という女があり、嘉平次の父親は、嘉平次がいつまでもおき
 はと結婚せずにおさがと遊んでばかりいることに怒って、遂
 にはおきはと結婚しないのであれば自分の腹を刺して死ぬと
 言う。それを隠れて聞いていたおさがは、「おきは様と夫婦
 になり、親御の心を喜ばせてくださいんせ、わし一人死ぬれば
 すむ」と嘉平次の父親が死なずにすむよう思いやって身を引
 こうとする。

鳥居フミ子氏は

おさがの念頭には常に愛する人をとり巻く人々の姿があつ

た。その人々をないがしろにして自分たちだけの幸せは

あり得ないと思つていたのである。おさがの姿は、ひた
 すら恋する人との二人だけの世界で愛の純粋性を貫こう
 としていつたおはつを思い起こすと、さらなる深まりを
 見せている

と述べている。⁵⁾ 家族を想う優しさは『心中二枚絵草子』のお
 島にもあるが、おさがの場合その優しさは自分の家族のみな
 らず、愛する人の家族にも向けられている。おさがは、人と
 の繋がりを大切にする性格で、それゆえに他者への思いやり
 が深い。

6 小春

『心中天網島』に登場する遊女小春は、言うまでもなく義
 理堅い性格で広く知られている。小春は『心中重井筒』と同
 じく妻子ある治兵衛という男と心中をする。しかし、この作
 品の主眼は治兵衛と小春ではなく、小春と治兵衛の妻おさん
 との人間模様だ。小春の性格を考察する上で、おさんの存在
 は欠かせない。

小春と治兵衛は物語の初めから、心中の誓いを立てている。

しかし、おさんから夫をどうか死なせないでくれという切実

な願いの手紙を受け取り、小春はおさんに了承する旨の返事をする。この時の小春の手紙には「身にも命にもかへぬ大事の殿なれど、引かれぬ義理合ひ、思ひ切る」と書かれている。このおさんとの義理のために、小春は治兵衛に愛想を尽かす振りをする。この行動について、川村佳代子氏は「遊女の小春が金銭以外のことに自分の身の振り方を指図される道理はない。したがって、おさんの依頼を受け入れなければならないという道徳観は本来であればいらぬものである」と指摘している⁶。それにもかかわらず、この義理が成立するのは、両者の利害が一致しているからに他ならない。小春にとっても、おさんにとっても治兵衛は何ものにも代え難い存在であり、治兵衛を死なせたくないというおさんの気持ちがいほど理解できた。小春が他の遊女たちと異なるのは、この第三者への共感による。小春も他の遊女たちと同様に治兵衛を一途に想う。しかしそれゆえに、死なせたくないという思いが、おさんからの手紙により一時的に勝ってしまうのである。結果的には、二人は心中をするが、最後まで小春はおさんとの義理を気にかけている。

また、太兵衛からの身請けを受け入れないという気概も小

春の特筆すべき性格の一つであろう。太兵衛は敵役であり、治兵衛の恋敵でもある。小春と治兵衛が心中の約束を反故にした後、太兵衛が小春を身請けするという噂が立つ。以前、小春は治兵衛に対して「たとへこなさんと縁切れ、添はれぬ身になつたりとも、太兵衛には請け出されぬ。もし銀壇きで親方からやるならば、物の見事に死んでみしよ」と発言している。苦界に身を落とした遊女にとって、身請けは救済であったはずだ。しかし、小春にとって治兵衛以外に身請けをされるというのは、『心中刃は氷の朔日』の小かんと同様に、新たな苦界に身を落とすことと同義であったのだろう。ゆえに、小春は一人死ぬ覚悟を、おさんへ返事の手紙を送った時から決めていた。

小春の義理堅さの由縁は他者への共感性、そして何よりも治兵衛を大切に想う愛情にある。そして、真に愛する者以外と結ばれることを厭い、自害を選ぶ、ロマンチシストな性質も併せ持つ女である。

二 死の理由と死に方

心中の理由は様々だが、鈴木昇氏は大きく三つに分類している。⁷⁾

- (一) 男の側に死ぬべき理由があつて、女がこれに従つもの。
- (二) 女の側に死ぬべき理由があつて、男がこれに従つもの。

(三) 男女相方に死ぬべき理由があるもの。

そして、本稿でとり上げる六作品については、(一) 『曾根崎心中』、『生玉心中』、(二) 『心中重井筒』、『心中天網島』、(三) 『心中二枚絵草子』、『心中刃は氷の朔日』と分類している。

1 男側に問題があるもの

まず、『曾根崎心中』に関しては、徳兵衛の縁談が間接的な原因である。徳兵衛は叔父にあたる親方から妻の姪と夫婦になるよつ言われる。徳兵衛はお初とのことがあつたため、それを断る。しかし、継母がすでに婚姻を了承し結納金を受

け取つてしまつていた。ここまでは徳兵衛に非はない。徳兵衛の愚行は、この結納金を継母から取り返してきた後だろう。この取り返した結納金を九平次に貸してしまつたことが、二人が心中した直接的な原因だ。徳兵衛は九平次に貸した金を返せと迫るが、そんなものは知らないと言われ、逆に判を盗み証文をでつち上げたという汚名を着せられる。徳兵衛は激怒して九平次に掴みかかるが、九平次とその連れに打ち負かされ辱められる。貸した金も返つてこず、あらぬ疑いをかけられた徳兵衛はお初に「もはや今宵は過されず。とんと覚悟を極めた」と言つ。この恥辱が徳兵衛の死の動機である。そして、お初はそんな徳兵衛の状況に心を痛め、共に死ぬことを誓つ。

『生玉心中』も同様に、嘉平次の縁談が間接的な原因である。嘉平次は茶碗屋の息子で、父親から従妹であるおきはと夫婦になるよつ言われていた。しかし、嘉平次はおさがとのことがあつたため、それを拒否する。父親は怒つて、おさがとの関係を絶ち、おきはと結婚しないのなら家の敷居を跨ぐなど言い放つ。それに加えて嘉平次は、おさがとの交際のために借金もあつた。嘉平次は駆け落ちをするか、自殺するか

しかないと考えていたが、長作という男が代わりに中国地方のお屋敷に父親の店の商品である茶碗などを売って、金を工面してきてくれるという。これで借金の方は何とかなりそうだと安堵する嘉平次。しかし、長作は、

いかにも売物は取り次ぎ、銀高一貫二百三十目代、十六両、たしかにあれに手渡しして、すなはち自筆印判の請取りを握つてゐる、じたいこれは、九之助橋、親五兵衛の店の売物、銀はおのが遣つて、親の手前の算用立たず、この長作を横道者にせうとは、底意の怖い盗人と嘉平次を陥れる。嘉平次は激怒し、長作に掴みかかり殴り

合いになる。この長作の企みによる冤罪が心中の直接的な原因である。その後、父親が嘉平次の元におきはと共に訪れ、このおきはと夫婦になれ、サアどうぢや、サア否か応かの返事せい、否と言ふとこの脇差、こりや、ハテびつくりすな、おのれは斬らぬ、人も斬らぬ、おきはが母は身が姉、父は他人、おきはをやまめにするかはり、身が腹に突つ込んで、一つ屋の五兵衛が一分立てて見せう、サア返事、サアなんと

と嘉平次に詰め寄る。嘉平次はこの時すでに死を覚悟してお

り最後の親孝行と、口先だけの了承をする。すると、父親は嘉平次が窮状を脱することができるようにと金を渡す。しかし、この金も長作に奪われてしまう。これが、最後の決定的な死への動機である。

この二作品は、同じような流れで話が進んでいく。初めに男の縁談が間接的な原因となり、次に友人の裏切りによって無実の罪を着せられたことが直接的な原因となる。そして、男の悲惨な状況に同情した遊女が一緒に心中をするという流れになっている。男側が引き起こした問題によって遊女が死ぬことになるのだが、遊女側には死なねばならない理由はない。この二作品はより遊女が哀れに思われる。しかし、自らの意志で死を選んだ強い女という印象が付きやすいようにも感じられる。

ところで、鈴木昇氏は『心中二枚絵草子』を「男女相方に死ぬべき理由があるもの」に分類しているが、どちらかというところ「男の側に死ぬべき理由があつて、女がこれに従うもの」に分類されるのではないかと考える。『心中二枚絵草子』の心中の直接的な原因は、市郎右衛門が義弟に無実の罪を着せられたことにある。市郎右衛門の義弟善次郎はあちこちで借

金をする素行不良な人物。挙句の果てに父親の金を盗み、その罪を市郎右衛門になすりつける。父親は市郎右衛門が金を盗んだと思ひ込み怒つて「もと我々が実子でなし、(中略)勘当ぢや、出てうせう」と言い放つ。この養父の言葉が市郎

右衛門の死の動機と言えよう。縁談こそないが、無実の罪を着せられるという流れは『曾根崎心中』『生玉心中』と一致している。鈴木氏はこれに加えて、お島の身請けが女側の死ぬべき理由とし、双方に死ぬべき理由があるとしている。確かに『心中二枚絵草子』の上之巻では、明石の貞というお島の馴染み客と市郎右衛門が恋の鞘当てをする場面がある。しかし、明石の貞は「おつつけお島を請けてみせう」としか言つておらず、身請けが確定していないことが分かる。また、小川嘉昭氏は「上之巻における市郎右衛門と明石の貞とお島をめぐる鞘あてが中之巻・下之巻に恋愛の悲劇として発展していない」と指摘している。したがって、お島に死ぬべき理由はなく『曾根崎心中』『生玉心中』と同様に男の悲惨な状況に同情し、心中したと考えられる。

2 女側に問題があるもの

『心中重井筒』は遊女お房の金の問題が心中の直接的な原因である。

わしが京の父様、よしない者の請けに立ち、明日限に銀立てねば、わしをやるとの判ぢやげな、わしはこゝへ身を売つて、先から連れに來た時は、二重売り、二重判、牢舎は鏡にかけたこと

と言つており、このために徳兵衛は自身の妻の印を勝手に使って金を借りるが、すぐに露見する。結局、借りた金は返すことになり、妻にお房との縁も切ることを約束する。この妻の存在が、心中の間接的な原因である。しかし、徳兵衛は妻との約束を破る。どうしてもお房のことが気掛かりになり、徳兵衛はお房に会いに行く。徳兵衛の兄夫婦はそれを阻止しようとし、二人を会わせまいとする。なんとかしてこつそりと会う二人だったが、徳兵衛の兄が様子を見にやってきたので、徳兵衛はお房を火燵の中に隠す。兄は火燵の中にお房がいることを知つていて、わざと火を強めてお房を虐める。この兄夫婦の態度が心中の最終的な動機である。

『心中天網島』は治兵衛の妻おさんが小春に宛てた手紙が

事の発端である。おさんは小春に「女は相身互ひこと、切れぬところを思ひ切り、夫の命を頼む」という手紙を出している。それを小春は「身にも命にもかへぬ大事の殿なれど、引かれぬ義理合ひ、思ひ切る」と了承する。元々小春と治兵衛は一緒に死ぬ約束をしており、起請文を書いていた。

この心中の約束は、二人の仲を裂こうとする店側の画策のために交わされたものであり、おさんは関与していない。この初めの心中の約束がおさんの願いによつて反故になつたことで、小春は他の者に請け出されるくらいならと一人で死ぬことを決意する。おさんの願いや小春を請け出そうとした敵役太兵衛の存在はあくまでも間接的な原因であり、全ては小春の意志がこの心中の直接的な原因である。最終的な動機としては、小春を助けようとしたおさんの諸々の計らいが舅によつて阻止されたことで、心中に至つた。

この二作品の共通点は、男側に妻子がいたことである。男が独り身ではなかつたがゆえに、人間関係がより複雑化している。また、男の兄弟が二人を別れさせようとする点も共通している。このように男に妻子がいる場合、必然的に遊女は周りから邪魔者とみなされる。ゆえに、この二作品では、周

りの人間からの妨害が顕著に見られる。加えて、男が優柔不断でパツとしない人物として描かれていることも、遊女の性格を際立たせている。

3 男女共に問題があるもの

『心中刃は氷の朝日』は男女双方に死ぬべき理由がある。まず、小かんが死ぬべき理由となつたのは、故郷で嫁入りをさせられることになつたためである。この心中の根本的な原因は小かんにあるが、彼女は初め、平兵衛と心中しようとは考えておらず、身請けされるくらいなら自害する気でいた。これを阻止するべく、平兵衛は小かんの身請け金を工面しようとする。平兵衛は鍛冶屋利右衛門の弟子で、親方である利右衛門に無断で注文を受け、内職して身請け金を工面しようとするも露見してしまい、勘当されてしまふ。これが、平兵衛の死ぬべき理由である。女に金が必要であつたということとは『心中重井筒』と同じである。しかし『心中重井筒』の場合、徳兵衛は一度は金を工面できている。そして、そのことが露見するが、妻に謝罪をして金を返し、お房との縁を切る約束をして、その罪を許されている。つまり、徳兵衛には平

兵衛と違い、帰れる場所が存在していた。平兵衛は勘当されたために、帰る場所もなく、小かんを救う手立てもないという状況になっている。

この作品は唯一、二人それぞれの問題が心中に至らせている。また、敵役が登場しないことで、より二人の不如意な出来事が哀れに思われる。敵役や妻子の存在がないことで、二人の死ぬべき理由が、それぞれ直接的な原因となっていて、行き場のない感情が残存するものとなっている。

4 死への手段

心中は、まず男が女を刃で刺し殺し、同じ刃で男が自らを刺して死ぬというのが一般的だったようである。しかし、そのような死に方をしているのは、『曾根崎心中』『心中刃は水の朔日』のみで、他の四作品の死に方はその例とは異なる。

まず、『生玉心中』『心中天網島』から見えていく。この二作品は、女が男に刃で刺し殺され、男は首を括って死ぬという形式になっている。『生玉心中』のおさがは嘉平次に脇差で刺されて死に、嘉平次はおさがの帯で首を吊って死ぬ。そして『心中天網島』の小春も治兵衛に刃で刺されて死に、治兵

衛は小春が死んだ場所とは違う所へ行き、小春の帯で首を吊って死ぬ。この死に方は、他者への義理のためである。『生玉心中』の場合、嘉平次が「同じ刃と思へども、守りにせよとの親の譲り、この刃に死するは最後の不孝」と言って親への義理のために、自らは首を吊って死んでいる。

『心中天網島』の場合、小春が、

二人が死に顔並べて、小春と紙屋治兵衛と心中と沙汰あらば、おさん様より頼みにて、殺してくれるな、殺すまい、挨拶切ると取り交せし、その文を反古にし、大事の男をそゝのかしての心中は、さすが一座流れの勤めの者義理知らず、偽り者と、世の人千人、万人より、おさん様一人のさげしめ、恨み妬みもさぞと思ひやり、未来の迷ひはこれ一つ、私をこゝで殺して、こなさんどこぞ所を変へ、ついと脇で

と言ったために、治兵衛は小春と別の場所へ行き死んでいる。この二作品は死に方を異にすることで、残される者たちへせめてもの義理立てをしている。

そして、イレギュラーな死に方をしているのが、『心中二枚絵草子』『心中重井筒』である。この二作品はどちらも二人

の死に場所が異なっている。「心中二枚絵草子」のお鳥は店の二階で、市郎右衛門は長柄の堤で同時に刃を喉に突き刺して死ぬ。「心中重井筒」のお房は徳兵衛に刃で刺されて死に、徳兵衛は追手から逃げるうちに井戸に落ちて死ぬ。傍から見れば心中に見えない心中であるのが、この二作品の特徴だ。

『心中二枚絵草子』は、お鳥が店から逃れられないために市郎右衛門が、

サア夜明けも近づくと、人立ちあり、一所と思へど為方なし、我は在所の堤にて、最期の所は変るとも、連れ立つ道はたゞ一筋、今より数珠を繰り初めて、一万遍に終る時、それが互ひの合図ぞや、おつつけ待つ

と提案してお鳥は了承する。二人は別々の場所で互いの姿を想像しながら死んでいく。

『心中重井筒』の場合、場所を違えて死ぬ気は二人にはなかった。しかし、徳兵衛の家族や家来が追手となって迫ってきていたために、急いでお房を刺し殺した後、見つけれまいと追手から逃げ回るうちに井戸に落ちて死んでしまつといふ、何とも哀れな死に方となっている。

いずれの作品も、遊女は刃によって死んでいる。そしてそ

の死の場面は、生々しく凄惨に描かれている。筆者はこれを性行為のメタファーであると考え、心中物の道行はしばしば結婚式に喩えられ、酒井順子氏は『曾根崎心中』の道行を「バージンロードを歩くようなもの」と述べている。そうすると、死ぬ場面は初夜ということになる。このような観点で見ると、心中自体がエロティシズムを漂わせているように感じられる。近松はこれらの創作をするにあたり、鎮魂の意を込めて、今世で結ばれなかった二人の「結婚」と「初夜性交」を描こうとしたのではないだろうか。

三 近松が創出した遊女像

1 心中立

元々、心中は男女が互いの愛を示し、誓いを立てる「心中立」というものであった。『色道大鏡』には「心中とは、男女の中懇切入魂の昵び、二心なき処をあらはすしるしをいふなり。これによつて、心中する、心中さするといふ名目なり」と記されている¹⁰⁾。そのうち、愛を誓う最高の証が命を差し出すことになり、所謂情死が心中と呼ばれるようになった。

『色道大鏡』では、六つの心中立を挙げてゐる。それが放爪、誓紙・起請文、断髪、入墨、切指、貫肉だ。いずれも、身体的負荷のかかる行為であることが分かる。

本稿でとり上げる遊女の中で、心中立をする描写があるのは小春だけである。小春は、治兵衛と起請文を取り交わしていた。そもそも、心中立は男女が互いに、目に見える形で愛を誓約することであり、小春以外の遊女は目に見える誓約はしていない。しかし、何らかの問題で二人が共に死ぬことを誓いあつた時、その瞬間に心中立は成立している。『色道大鏡』に記載はないが、言葉だけの心中立も実際にあつたと考えられる。心中をすることで 来世は一緒になれる という概念、来世思想が社会にあつたからこそ、近松の心中物はよりドラマティックに感じられ、観客の心を魅了したのだろう。

2 実際の心中事件

近松の心中物がこのように人気を博した要因は、勿論彼の才筆もあつただろうが、大きな要因はその感動性にあると考へる。世話物第一作目である『曾根崎心中』は実際にあつた心中事件を近松が脚色してできた作品だ。

書方軒の『心中大鑑』巻三には、その実際の事件に近いのではないかと思われることが書かれている。それには、

跡の支配すべき物なければ、旦那忠右衛門養子娘十八になりけるを、徳兵衛と縁組して、江戸店の重り権にと思ひたつ拵、徳兵衛一切嬉しからず、天満へかけてゆけば、爰にもまた豊後の客、大坂に来て一年あまり、慰の興も仕尽し、二三日中に国へ帰るに、女房とてもなき身なれば、幸ひなじみのかたじけなきおはつ事は引かいて行とあり、徳兵衛は縁談、お初は身請けが、心中の原因であつたと記されている。これを見ると、近松が事件をかなり脚色して書いていることが分かる。『曾根崎心中』では、徳兵衛が敵役九平次の企みによつて冤罪となり、辱められたことが心中の原因となつている。しかし、実際は徳兵衛の縁談とお初の身請けという双方の問題があつて心中に至つている。また、九平次は、架空の存在であつたのではないかと思われる。敵役が存在がストーリーに深みを持たせるのは定石だ。九平次は、二人の死の必然性を高める存在として追加されたのだろう。

『心中大鑑』には、二人がどのようにして死んだのかは書

かれていない。無論、実際の心中事件の死の瞬間は誰にも分らないことだ。しかし、近松は二人の死の瞬間を生々しく詳細に描いた。誰にも知りえない最期の瞬間を描き出したことで、物語として成立し、感動を生むものとなっている。

藤野義雄氏は、

近松が、こうした事実を劇化するにあたって試みた方法は、言わば社会の脱落者と見なすべき是等の当事者を、純粹情念ともいふべきひたむきな熱情の持主たらしめ、これが周囲の障壁に激しく衝突するところに悲劇的な感動をつくりあげようとしたことだった。

と述べている。恋愛は障害があればあるほど熱くなりやすいという考え方は、現代にも存在している。しかし、当時は恋愛感情のみの理由によって心中することは、同情を引くものではなく、寧ろ非道德的であるとされ、蔑みの対象であった。だからこそ近松は、実際の心中事件を脚色するにあたって、よりストーリーが盛り上がる要素である 経済的理由 を話に組み込むことによって二人の心中を正当化し、観客の同情を引きやすくしたのではないかと考える。このように考えると、六作品の心中の要因として共通しているのが金銭問題で

あることが分かる。

なお『首根崎心中』以外の五作品の事件については『心中大鑑』には記されておらず、詳細は不明。したがって、他の五作品の 経済的理由 が実際にあったのかどうかは不明だが、それらも追加された要素である可能性がある。

3 女性の愛への執着

近松の描く遊女たちは、皆強かだ。死を厭わず、ある者はそれをリードさえする。意志の強い女として描かれ、現代の女性にも通ずるものがある。遊女は男の需要によって誕生した言わば男尊女卑の最たる被害者である。それにもかかわらず、遊女は男を手練手管で翻弄する 悪 と見なされていた。近松は、悪として認識されていた遊女を 社会的弱者 として際立つように描いた。先述したように、物語として感動するものにするためには、観客の同情を引くものにせねばならない。したがって 遊女＝悪 というイメージを払拭する必要があった。

現代でも小説や映画など、女性を強かに描く手法をとった作品は多い。その意図は 女性らしさ からの脱却であり、

ジェンダーバイアスを無くすためである。しかし、近松の場合、遊女たちを強かに描いた理由は、女性らしさを強調させるためであったと考える。当時の女性たちは封建社会の中で生き、抑圧された社会の下で暮らしていた。そんな中で、女性たちが唯一自己の存在を意味あるものとして認識できるのが、恋愛であった。恋愛は両者が互いを求め合うからこそ成立するのであり、女性が能動的になっても許されるものだった。だからこそ女性は恋愛に執着し、男性を盲目的に愛することによって自己主張をした。それが当時の女性の在り方であった。つまり近松の描く遊女たちは、恋愛に対して貪欲に生きる当時の女性を反映させたものであり、彼女らの封建社会に対する批判（慨嘆と言っても良い）をその心中に宿していた。廣末保氏は、遊女たちは封建的な抑圧のために心中をしており、その心中は封建性に対する逆批判に当たる。しかし、近松の場合は心中することに意志的な要素を取り入れていると指摘している。¹³

遊女たちを強かに描くことで、現実の女性たちは、それと自分と重ね合わせることができる。遊女＝悪 というイメージを、遊女＝社会的弱者 と変換することが可能となる。

遊女は男を慰める商品であり、自分たちと違って普通に恋愛をすることすら許されない可哀想な存在であるのだと認識させることで、作品に没入できるようにした。そして、遊女たちの心中が封建社会における敗北ではなく、愛する人との恋愛成就であることに意味を見出した。これが廣末保氏の言う意志的な要素であり、近松が最も意図したところであろう。近松は遊女の恋愛を極めて冷静な目で見ており、それが報われることはないと考えていた。しかし、それでも恋に生きる遊女たちの性を哀れに思い、同時に逞しさを感じていたのではないだろうか。ゆえに、心中物は悲劇としてではなく、恋愛成就譚として書かれたのだと考える。

おわりに

本稿では、近松の描く遊女たちの性格や心中の理由、そして近松が創出した遊女像について考察した。古くから女性は虐げられ、あらゆることに受け身でなくてはならなかった。それは恋愛面においても同様と考えられ、それゆえに、近松が描いた遊女たちが強かな性格である理由は不可解に思われ

た。しかし、その、あらゆることに受け身でなくてはならなかった という考えこそが間違っていた。

江戸時代、女性は恋愛においてはむしろ男性をリードする立場であった。近松は、それを遊女という恋愛が許されない者を主軸において描いた。遊女が心中をするのは、愛する者と一緒になれないからだという世間の見解に対して、近松は、遊女が心中するのは愛する者と結ばれるためであり、彼女たちはそれを果たしたのだと捉えた。遊女は真に愛する者に対し、己の身体を傷つけてでも相手への愛を証明した。このような行為からも彼女たちの強さが分かるが、それは遊女特有の心意気という訳ではなく、当時の女性たちは皆恋愛に貪欲で強かであった。

近松は、心中する遊女一人ひとりに深い哀情を抱き描いている。それは、同情とも言い難く、ただその決まった死の行く末を温かく見守る傍観者であった。しかし近松は、それぞれの遊女に異なる強さや優しさを付与し、個々に描き分けた。実際に心中した遊女たちの性格がどのようなものであったのかは知り得ないが、こんな人物であったのかもしれないと想像し、彼女たちの人生を遊女としてではなく、一人の女

性として尊重するべく脚色したのである。

心中物は悲劇性があり、可哀想と思わせるような描き方がなされている。しかし、心中物は悲劇ではない。近松は心中物を恋愛成就譚として描き、それを亡き当事者たちに鎮魂劇として手向けた。これらの作品は後に心中流行のきっかけとなるが、これは近松の望むところではなく、また心中を賛美しているなどと捉えられたことは、彼にとっては不本意なことであっただろう。

注

- (1) 堀江珠喜『純愛心中 「情死」 はなぜ人を魅了するのか』(二〇〇六年、講談社)
- (2) 『新編日本古典文学全集 近松門左衛門集2』(一九九八年、小学館)
- (3) 大谷晃一『文楽の女たち』(二〇〇二年、文藝春秋) 一三頁
- (4) 鳥居フミ子『近松の女性たち』(一九九九年、武蔵野書院) 二八・二九頁
- (5) 同右、一五七頁
- (6) 川村佳代子『「心中天の網鳥」考 小春とおさんの義理について』(『国文研究』四一号 一九九六年三月)

- (7) 鈴木昇「近世世話物の考察 序」(『芸文研究』五号 一九五五年一月)
- (8) 小川嘉昭「『心中二枚絵草子』の方法 「女のドラマ」の展開」(『同志社国文学』二五号 一九八四年二月)
- (9) 酒井順子『女を観る歌舞伎』(二〇一四年、文藝春秋) 八頁
- (10) 藤本箕山撰、野間光辰解題『色道大鏡』中巻(一九七四年、八木書店)
- (11) 書方軒『心中大鑑』(二七〇四年)は、国書刊行会編『近世文藝叢書』四巻(一九一〇年)に翻刻されたものを用いた。
- (12) 藤野義雄『近松の世話悲劇』(一九六一年、碩学書房) 一八七頁
- (13) 廣末保『近松序説 廣末保著作集 第二巻』(一九九八年、影書房)

(中京大学文学部在學生)